

木の駅プロジェクト美和（茨城県）

「何でもやれそうだ！」



▲木の駅プロジェクト美和  
実行委員長の龍崎眞一さん

「このままではダメになる」

「やるぞ！ 決めた」。東京から帰ってくるなり龍崎眞一さん（木の駅プロジェクト美和実行委員長）は、盟友の清水浩さんに宣言した。龍崎さんは、茨城県常陸大

宮市美和地区で建設会社を営む3代目社長。美和地区は林業集積地、和紙の産地として栄えてきたが、人口は4000人を切り、小学校の新生も一桁に迫っている。龍崎さんは、このままでは美和はダメになると危機感を募らせていた。そんな矢先のことだった。東京での講演の直後に駆け寄ってきた龍崎さんは、「いつなら美和に来れますか？」と手帳を開いた。その2週間後。ヤケドしそうに熱い

龍崎さんと沈着冷静な清水さんと3人で、時間を忘れて話し込んだ。それから半年、忘れかけていた頃に電話がかかった。「もうすぐ始めます」。びっくりした。

村の底力を引き出す

「木の駅」ホームページから運営マニュアルをダウンロードしたり、先駆者の活動報告書をそのままアレンジして、頻繁に実行委員会を開いて進めたという。第1期は2012年6月17日から7月末までの集荷となった。

8月初旬に電話した。「どうだった、面白かった?」「はい、面白かった!」。声が弾んでいた。「どれくらい集まったの?」「出荷登録48戸、277m<sup>3</sup>」。驚い

た。「商店は57店」……。その数字よりも、主催者本人たちが「面白かった!」を共有できたであろうことが何より嬉しかった。

地元商店の相次ぐ廃業に危機感を募らせていた相河酒店の相河勝夫さんは、龍崎さんたちの呼びかけにすぐに反応した。商店を片っ端から回って参加を呼びかけ、同意を取り付けた。それを知って、美和木材協同組合の大森豊さんや森林組合の薄井均さん、県職OBの川野和彦さんらは慌てた。「商店が頑張つて、山の出荷者がちょっとでは格好がつかんべ」と仲間への声掛けが始まった。そんな勢いが村の底力を引き出した。

3500円/m<sup>3</sup>で引き取って、畜産用の敷料などに加工される。出荷者には5000円/m<sup>3</sup>がモリ券で支払われ、市や県からの助成のない中、差額は龍崎さんや清水さんで作る「森と地域の調和を考える会」が負担した。

第2期は10月20日〜11月末まで。245m<sup>3</sup>集荷した。今度は赤字克服のために寄付材を呼びかけた。そうすると、心配した個人や森林組合から大量の寄付材が寄せられた。結果、第2期では逆ザヤ（過払い）は解消した。みんなで助け合つて続けていこうという村人の意識が現れ始めた。

本気でこの村と共に生きる

桑田福次さんは、定年退職を機



▲オープン日の2012年6月17日、出荷者が勢揃いした



▲軽トラが並びきらず渋滞(?)の様相

ろまでを体験した。「なんでお金じゃないの」との質問に、大人たちが真摯に説明する。「なんでこんな『木の駅』をやるのか? 一人一人の幸せや豊かさは、地域全体がそうでなければ実現できない……」。汗を拭きながら、大人



▲「山はやっぱり清々しい」と桑田さん



◀「この山は、全部、桑田さん一人できれいにしたんだよ」

▶「これまで来なかったお客さんが増えた」と相河さん



にシイタケ栽培を始めていた。その初収穫を目の前にして東日本大震災があり、出荷を控えることになった。これからという時に味わった挫折だった。そんな時に木の駅プロジェクトが始まり、好きな山仕事にまた精を出し始めた。「山はやっぱり清々しい」と目を細める。

3月1日、そんな桑田さんの山に小学生たちの声がこだました。隣の常陸大宮北小学校の5年生25人が訪れた。「森と『木の駅』のことを子どもらに伝えてほしい」と、木の駅プロジェクト実行委員会に依頼が舞い込み委員全体で引き受けた。子どもたちは暗い森を見たあと、手入れの行き届いた福田さんの森に入った。「この山は全部、福田さん一人できれいにしたんだよ」の説明に、「カッコイイ」と目を輝かせる。子どもたちは、木を軽トラまで運んで積んで木の駅に出荷し、モリ券を受け取り使うところまでを体験し

たちが自問自答するように答える。子どもたちは森や木だけでなく、本気でこの村と共に生きようとする大人たちの姿を見るのだった。茨城県常陸大宮市美和地区。自分たちの村のことは、自分たちでなんとかやれることの確信が深まってきた。「なんでもやれそうだ。今度は薪販売や地域の温浴施設への燃料供給なども始めようか……」と、アイデアが膨らむ。一人の覚悟と郷土愛から、これまで動きそうになかった村がザワザワと動き始めた。